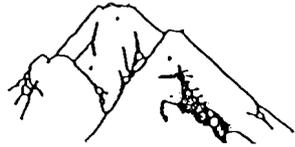


# はね馬



妙高市立妙高中学校  
学校だより  
平成23年12月22日号

## 今年の漢字「絆」が教えてくれるもの

校長 陸 川 晃

先日、毎年恒例となっている今年の漢字「絆」(日本漢字検定協会主催)が発表されました。3月11日に発生した東日本大震災は、未曾有(みぞう)の被害をもたらすとともに私たちの生活の在り方を見直させる機会となりました。尊い命が失われる厳しい状況の中で、改めて人と人とのつながりで生きていく「絆」の大切さに気付かされたと言えます。

本校が、社会性育成活動で支援を受けている竹内臨床心理士が、ある機会に「絆」について話されたことを紹介します。「最近『絆』が大切だと言う人が多くなったが、一昔前までは、その『絆』は『しがらみ』として人々が断ち切って来たものである」というお話です。今、問題となっている「無縁社会」は、正にその「しがらみ」を断ち切ることによって進行してきた結果と見ることもできます。「本当に大切なものは、目には見えない」といわれますが、それは「失ってみて初めて気付かされるもの」なのかもしれません。この震災を機会に日本中で、人と人がつながる「絆」を大切に、「しがらみ」として断ち切ることのないよう努力したいものです。

ところで、この「絆」は、子どもたちにとっても大切な「生きる力」に関係するものです。心理カウンセラーの富田富士也さんは、「人間は誕生と同時に誰もが避けられない『孤独』という現実を背負う。孤独だから、人とつながる人間関係の術を幼き頃から学んでいくことが大切である。孤独から抜け出すには、人を信じて素直に『助けてください』『協力してください』と甘えることであり、それが人とつながることになる。人を信じることなく、強がったり、拒絶や無視されることを恐れたりして甘えられない人は、権利や義務を言い出す姑息な甘え方になったり、孤立を深めたりしてしまいがちである」と言っています。大人には、子どもたちが人とつながることができるように、あいさつの指導はもちろんですが、「素直に甘える」「相手を信じる」勇気をもてるように育てていく責任があるようです。そのためには、まず大人がその姿勢を見せ、「甘えてもらえる」存在になれるように心がけていく必要があります。

震災で避難し、本校に通学していた3名の生徒と本校の生徒の間にも新たな「絆」が生まれました。2学期末で全員が福島県に戻りました。これからも数々の困難に負けずに、元気に成長して欲しいと願わずにはられません。妙高中学校の生徒も今回の出会いを通して、思いやりをもって受け入れるという素晴らしい経験をしました。ぜひ、3学期からの生活に生かして「人の役に立てる人間」に成長して欲しいと思います。

<生徒がいろいろな人と出会ったり、かかわったりした今年の名場面の中から>



小中合同遠足



ふるさとまつりでの茶席



児童クラブでの読み聞かせ



職場体験学習

最後になりましたが、今年一年の妙高中学校へのご支援ご指導に感謝申し上げますとともに、新年も何とぞよろしくお願ひ申し上げます。